

前川のかっぱ伝説

豊前市八屋の前川に、城根川という川があるのを知っているのかのう。今はこれといってかわったところがあるわけではない、ふつうの小さな川じゃが、実は昔大きなふちがあつてな、かっぱが住んでおつたという言いつたえがあるんじゃ。どれ、一つ話して聞かそうか。

かっぱと聞いて、たいていの人かそうぞうするのは、おかっぱ頭のとっぺんにお皿を乗せ、くりくりとした目とどがった口の何やらかわいすがたであるう。こんなすがたのかっぱが、まんがなどにも登場するからのう。今も「かっぱ祭」が行われたり、「かっぱ石」「かっぱ松」などというものがあるのこつている土地もあり、人々に親しまれておる。

しかし、いろいろな土地の言いつたえに出てくるかっぱは、そんなあいきようのあるやつばかりではない。はだは又ル又ルとして赤黒く、からすの口ばしや羽根のような物を持っているものもあるよ。うじゃ。頭の皿が元氣のもと。これがかわいたとたんにへねへねと力がなくなってしまうが、皿がうるおっているときのふしぎな力といつたら、もう、おそろしいばかりじゃ。

さて、城根川のかっぱの話じゃ。ここの元氣のよい子どもかっぱのことじゃ。

そのころの村の子どもたちの遊びといつたらな、おにごっこに石けり・・・、外でどろんこになり遊んでいたのじゃ。すもうは大の人氣でな、これに勝つと、力持ちだというので、たいそういばれたもんじゃ。

ある日のこと、いつものようにかわらに集まり、カジマンの男の子たちがすもうをとって遊んでお
った。そこへ見なれん子がどこからともなくやって来て、

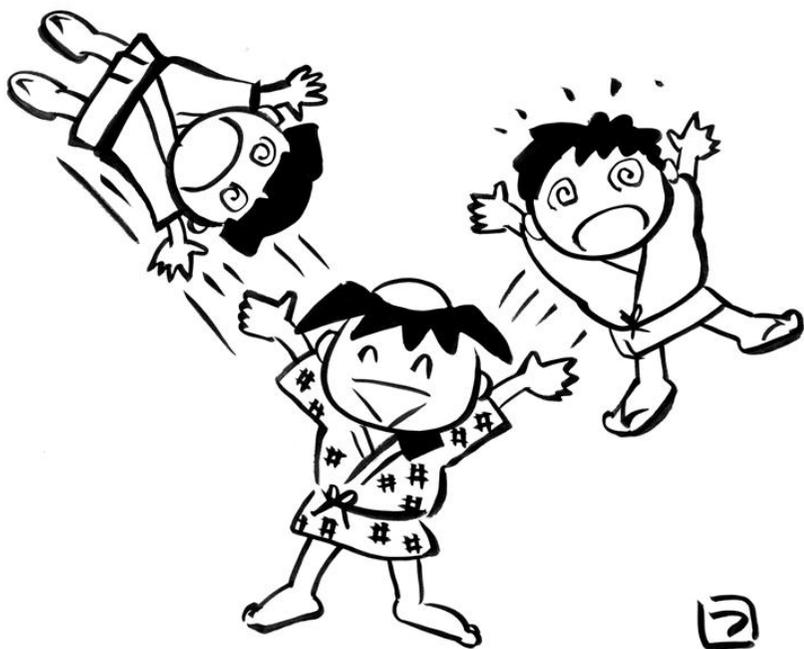
「おらもすもうにまぜてくれ。」
とたのんだと。

見ると、顔色の悪い小さな体の子じゃ。弱そうだなあと思
ったが、せつかく来ているのだからと相手をすると、これが
めつぼう強い。なんと、村一番のがきだいしょうまで投げと
ばされてしもつた。それならと、村の子どもたちは三人がか
りで顔を真っ赤にし、その子にむかっていったそ
うな。じゃが、ぽいぽいぽーいと、軽々と三人とも投げら
れてしまったそうな。

そしてその子は、
「へのカッパ。」

と、ケタケタ笑い、川の中にドボンとすがたを消したんじ
や。投げられた子らはポカーンと口をあけ、川に消えていっ
た男の子を見ていたがの、おそろしくなり、あわてて家に
帰った。そして家のもんに話したそうじゃ。

「そらあ、かっぱのしわざにちがいない。そんなら、おまえ



「たちにいいことを教えてやるう。今度すもつをするときは、ほとけ様にそなえてあるおぶっぱんを食べてから行くといいで。」

おとうたちがちえをつけてくれたと。

そんなことがあるんじゃないやろうかと思つたが、おとうたちがあまりに自信ありげに言つもんで、次の日、言われたとおりにおぶっぱんをいただいて、かわらに出かけた。子どもたちは、一番の力持ちになろうと、何度も何度も、土ひょうにさがり、すもつをとって遊んでいると、きのうのへんな男の子がまたあらわれ、

「きょうもすもつにかつせてくれ。」

とたのんだと。そこでまた、みんなですもつをとることにした。するとどうだろう。きのうあれだけ強かつた男の子が、一人目の村の子とぶつかり合つたとたんに、

「こらあ、かなわん。勝ち目はなし。」

とさげんだかと思つと、いちもくさんににげ出し、川の中にドボンとすがたを消したんじゃ。子どもたちは、

「わーい、かつぱがにげたぞ。」

「おとうは、えらいなあ。よく知つているなあ。」

と、おとうたちのちえにおどろき、かつぱが消えた川を見ながら、とんだり、はねたり。そりゃー、大よろこびじゃつた。それいらい、子どもかつぱは、全くあらわれなくなつたと。さすがのかつぱも、ほとけ様の力にはかなわんじゃつたといふことかのう。

城根川にはな、またべつのかっぱの話も言いつたえがあるんじゃ。大人のかっぱでな、はて何があつたんじゃろうかの。

ある日のことじゃった。村のわか者がこのかわらを通りかかったと。そこへ、一人の男があらわれ、わか者を呼び止めたそうじゃ。

「これ、おわかい人、どこへ行きなさる。」

「はあ。ちよつと用事があつて、となり村まで。」

「そうか。では、たのまれものをしてくれんかのう。何、そんなたいそうなことではない。この川を少し下つた所にわたしの友だちがおつてな、その友だちにこの手紙をわたしてもらえんか。」

なにやら、みような気もしたが、ついでのことじゃったんで

わか者は、仕方なくあずかることにしたと。するとその男は、

「ねんのために言つておくが、この手紙を道々読んだりする

ことのないように、くれぐれもたのんだぞ。」

と、ねんをおしたそうな。そう言われると、かえつて見たく

なつてしまうのが人というものでの。気になつてしようがなく

なつたわか者はな、とちゆうで手紙を開いてみたそうな。する

とぶつたまげたことに、『この男を川に引きずりこみ、しりの

あなからきも（内ぞう）をぬけ。そうすれば百人力になるぞ。』

と書いてあるではないか。

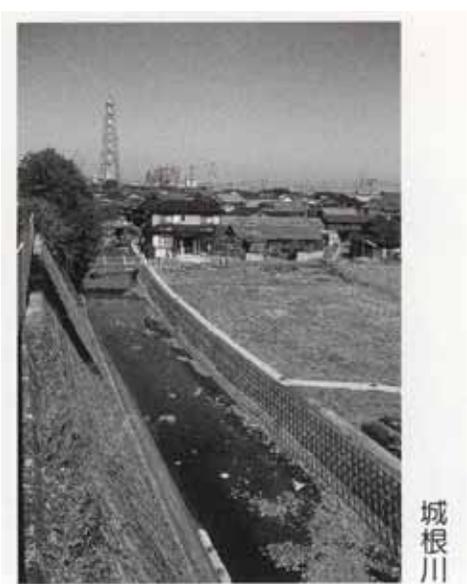


「しりからきもをぬくのはかっぱのすることと言われとる。では、あの男はかっぱだったのか。だまされて、きもを取られるところだった。」

わか者は大あわてで手紙を投げ出しいちもくさんにげ帰り、命をうしなわずにすんだそつな。

どうじゃ、日本中にこんな話は山ほどある。いいか、川で遊ぶときはくれぐれも、かっぱに気をつけるんじやぞ。

(末吉育子)



城根川